

情報収集を伴う民俗学的視覚資料の上映についての覚え書き

Field Notes on Information Gathering through the Screening of Visual Folklore Materials

因 琢哉 岡田 翔平

YIN Takuya OKADA Shohei

要 旨

本稿は、一言で言うなら業務の詳細である。

執筆者は2010年と2011年に、本共同研究が鹿児島県鹿児島郡十島村の口之島と中之島で資料情報の収集を目的として実施した上映会に随伴して映像の操作や場内の撮影・録音の実務を担当し、また取得した撮影・録音データの整理作業にも従事した。本稿はその詳細を記すもので、要すれば、上映会の実務的な面についての概要と検証の記録であり、上映会のあらましを技術的側面から述べている。

また2013年度、これらの業務の成果をもとに本共同研究は『国際常民文化研究叢書8—アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象— [資料編]』を刊行した。本稿はその刊行に至るまでの作業過程を述べたものでもあるとも言える。

まず、口之島と中之島での上映会についてそれぞれ述べ、続いて収録したデータの整理方法について述べる。

上映会の概要では、概ね撮影と録音の方法についての検証に紙数を割いた。これは上映会で集める「資料情報」というものの本体が上映会観覧者の話し声であるため、撮影や録音の成否がそのまま情報収集の成否に繋がるからである。さらにこの点において、映像や音声に対する技術的知識が乏しい執筆者は、絶えず反省を迫られることになったためでもある。

また、収録したデータはそのままでは非常に扱いづらいことから、データの整理についても可能な限り詳細に述べた。データの整理とは、端的に言えば音声の書き起こしである。ただ、本共同研究の目的を考えると単に書き起こすだけでは不足で、どの資料が上映されているときにどのような声が観覧者から上がったのかを明確にする必要があった。その方法の説明には力を置くよう心がけた。

最後に、「次」の上映会についても述べた。これは今後、同様な試みがなされた場合に向けての参考として、執筆者が業務の中で得た所感を記したものである。

【キーワード】 上映会、録音、書き起こし、情報収集、情報整理

1. はじめに

本稿の執筆者2名は、2010年と2011年に本共同研究「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」（研究代表者：高城玲）が鹿児島県鹿児島郡十島村の口之島と中之島で資料情報の収集を目的として実施した上映会において、映像の操作や場内の撮影・録音の実務を担当し、取得した撮影・録音データの整理作業にも従事してきた。また、上映会で収録したデータ整理にも携わり、これをもとに2014年3月に刊行した『国際常民文化研究叢書8—アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象— [資料編]』（以下、『叢書』資料編と呼ぶ）の編集作業を担ってきた。

本稿はこうした執筆者の立場から、本共同研究が口之島・中之島両島で催した上映会の概要とデータの収録方法、及びデータの整理方法についての概要を紹介し、あわせて自己検証を行うことを目的とする。いわば、従事した業務の詳細とも位置づけられる。

本稿の構成であるが、まず上映会の概要と検証を、口之島と中之島それぞれについて記す。次に、データ整理について記す。データの整理方法は4つの工程を踏んで行ったため、その工程の順に記す。口之島と中之島とでは整理方針の異なる点もあるが、踏んだ工程は両島ともに同じであるため、そのような相違については各工程について記す中で触れる。最後にこれらを踏まえて、「次」の上映会に向けての提言を記すこととする。

本稿では使用した機材のメーカーや型番を具体的に示しており、その性能についても言及している箇所がある。これらはいくまでも執筆者が業務に使用した上で抱いた個人的感想であり、製品を貶める意図はなく、当然ながら絶対的な評価とは異なる。

また、本稿では次の語句を多用しているが、特に説明のない限りこれらは以下のような意味で用いている。

フィルム…アチックフィルム⁽¹⁾、もしくは動画全般
写真……アチック写真、もしくは静止画全般
カメラ……動画撮影用のカメラ

2. 口之島での上映会とその検証

1) 上映会の開催

【概要】

開催日時：2010年3月23日14:00～16:30

会場：十島村立口之島小中学校 体育館

観覧人数：約50人

使用機材：ビデオカメラ×3

(Canon PV1×1、SONY HDR-FX7×1、SONY HDR-XR550×1)

デジタルムービーカメラ×1 (SANYO Xacti DMX-CS1)

ICレコーダー×4

(SONY ICD-UX200×1、SANYO ICR-PS1000M×1、他は形式型番不明)

ラップトップパソコン×1 (HP G61)

電源用リールコード×1 (現地借用品、形式型番不明)

映像出力用プロジェクター×1 (現地借用品、形式型番不明)

自立式スクリーン×1（現地借用品、形式型番不明）

【機材と人員の配置】

会場の略図（図1）をもとに、収録機材それぞれの位置関係を見てゆこう。

カメラは計4台を使用した。このうち上映会の始めから終わりまでを収録する常時稼働機であったのは2台で、舞台袖のHDR-FX7とPV1である。カメラには操作手が一人ずつ付き、HDR-FX7を共同研究者の原田健一が、PV1を執筆者2名がそれぞれ担当した。電源はいずれもACアダプターによって確保した。

常時稼働機の2台にはそれぞれに役割が与えられていた。HDR-FX7はガンマイク（指向性マイク）を装備し、固定カメラとして向かって右側の舞台袖から観覧席を俯瞰した。PV1は観覧席中央から後方を移動しつつ、上映内容の撮影とカメラ周辺の音声の収録を担当した。上映内容の撮影は、どの資料を上映しているときにどのようなコメントが発せられたかを記録するために行うもので、データ整理の際に重要な意味を持つ。これはデータの整理について述べるところで改めて説明する。

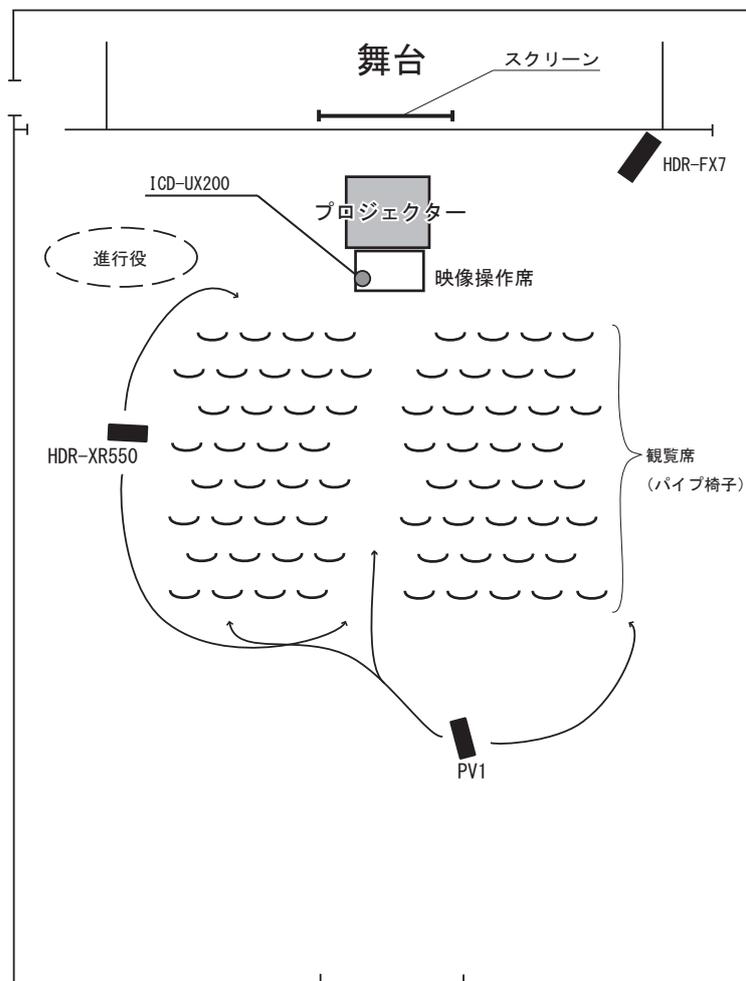
他のカメラは状況に応じて稼働させた。DMX-CS1はPV1の控えとし、PV1の操作手が携帯した。PV1が映像記録テープであるMiniDVを使用するため、テープ交換時の撮影時間の空白を埋めるべく用いた。HDR-XR550は観覧席を左側から撮影した。手が空いている者がいたときのみ用いた遊軍機であるが、高城玲が操作することが多かった。なおHDR-XR550はワイヤレスマイクを装備し、観覧席左側の音声も収録している。

【上映会の進行について】

上映は2人の進行役と、映像操作手1人によって進められた。進行役が2人であるのは、フィルム上映時と写真上映時で役を交代したためである。進行役は本共同研究の共同研究者が行い、映像操作は執筆者が担当した。

進行役の役割は映像操作手を指揮しながら上映を進行

図1 口之島の会場略図



PV1とHDR-XR550から伸びる矢印はカメラの移動を意味している。観覧席を前後の列で互い違いに配置したのは後列の観覧者の視界を妨げないためで、共同研究者の原田健一の教示によっている。本図は会場の設営状況と機材配置を示すための概略図であって縮尺は考慮しておらず、また施設設備にも実際とは異なる点がある。

し、また観覧者の発言を促して上映中の資料に関する情報を引き出すことにある。要するに〔1〕上映内容の説明、〔2〕上映内容への質問提示、〔3〕映像操作手への指示、の3点である。以下、具体的に述べる。

まず〔1〕だが、この比重はそれほど大きくない。個々の資料について、こちらから説明できることはほとんど無い。渋沢敬三一行の調査経緯や行程、あるいは資料の説明としてアチック同人らが残したメモ書きについてなどを簡単に紹介した程度にとどまる。

対して、大きな比重を占めるのが〔2〕の質問提示である。上映内容について「ここにこんなものが写っています」などと指摘した上で「これはなんですか」「知っている人はいますか」という具合に会場に質問を投げてゆく。フィルムであれば被写体に変化するたびに、写真であれば1点ごとにこれを行う。よって上映中は〔3〕で述べるように再生・一時停止・巻戻しを繰り返した。提示した質問は、写真については事前に配布したパンフレット『神奈川大学日本常民文化研究所 アチック写真』（以下、『アチック写真』と呼ぶ）に沿って投げかけられ、フィルムについてはほぼアドリブで行われた。質問内容は撮影地や撮影されている人物・事物を尋ねるものがほとんどであり、これはフィルムについてでも写真についてでも変わらない。パンフレット『アチック写真』については、注「パンフレット『アチック写真』の作成」⁽²⁾を参照のこと。

〔3〕は〔2〕と同時に行う。質問したい箇所映像を止め、場合によっては部分拡大なども指示する。また観覧者から「今のところをもう一度見せてくれ」「あの部分を拡大してくれ」といった要望が出れば、これに応じて指示を与える。映像操作手はこの指示に従いプロジェクターに接続したラップトップパソコンで映像を操作する。操作手は基本的に観覧席に背を向けて操作するため観覧者の要望を直に確認することはない。進行役の指示が重要となる。操作席に置かれたICレコーダー（ICD-UX200）の操作も映像操作手の担当であった。

なお、上映の順序であるが、まずフィルム⁽³⁾を上映し、次に写真を上映した。写真の上映順は目録番号⁽⁴⁾の順序を無視し、景観、建築、芸能、民具など、被写体の傾向が似ているものを寄せて並べた。特に、被写体が同じ資料は連続して上映している。傾向にあわせてまとめたほうが見てわかりやすく、コメントもより引き出せるのではないかと思われたためである。上映中は休憩時間を挟まなかったが、上映中も会場への出入りは自由であったため、特に不都合はなかったと思われる。

2) 検証と反省

口之島での上映会は島の方々からの反応も概ね良好で、催しとしてはひとまずの成功を収めた。ただし、情報収集という面から見ると、共同研究としてはじめての試みであったこともあり、不十分な点が見うけられたことも指摘しておかなければならないだろう。

端的に言えば、音声の網羅的な収録が不十分であった。上映会場で観覧者からもたらされる「情報」とは、観覧者が各所で上映内容について交わす会話や眩きが主であり、音声収録の成否は収集する情報の量に直接影響する。そして、口之島で収録したデータは、単語とその前後のセンテンスが辛うじて拾える程度のもので多く、極めて聞き取りにくいものであった。

2点の原因が考えられた。〔1〕想定甘さと、〔2〕収録機材の性能への認識不足である。

まず、〔1〕の想定甘さについて述べる。これは、端的に言えば、上映中の会場の雰囲気事前に想定しきれていなかったということだ。

当初、執筆者には進行役と観覧席の問答の様子を、何か手を挙げて順番に発言してもらおうような類の、比較的フォーマルな形式を想定していたようなところがあった。

後から考えれば当然ではあるのだが、実際は、そのような形の間答はほとんど行われぬ。会場からの声を張った発言は予想以上に少なく、発せられるコメントの大半はスクリーンを見て皆が思いついたことを口々に語り合うおしゃべりであり、あるいは眩かれる独り言であった。時折、質問を重ねる進行役に応えるかたちで自分の意見や周囲の声をまとめて代表するような発言を、声を張ってしてくださる方もある。ただ、そういった方は概ね2人前後で、その顔ぶれも決まっていた。実際にはその周辺で、その数倍の人々が資料に対してさまざまなコメントをざわざわと発しているのだ。そして、そのざわざわのなかには、かなり具体的で興味深いコメントもあった。

声の大きい代表的な発言のみをデータとして扱えばよい、という考え方も無論あるだろう。ただし、実際に会場内で人々の眩きを聞いていると、ひとつの資料に対して述べる意見や認識が人によって違っていることも意外と多かった。観覧席の右側でAと言われ左側でBと言われるようなことがしばしばあり、AとBの内容が正面から食い違う⁽⁵⁾ことも珍しくない。誰かが声を張って発言している後ろで、別の誰かが「いやあ、それは…」と首を傾げていたりする。ひとつの大きな声だけを情報として拾い上げると、このあたりのもやもやとした感触は切り捨てられてしまうだろう。上映会の目的のひとつである「情報収集」とは、言い方を変えるなら観覧者という集団を対象とする聞き取り調査であるから、そのもやもやを切り捨ててしまうと、本共同研究の試みがはらむ面白さも切り捨ててしまうように感ぜられた。

これは、誰の声が正しくて誰の声が間違っているかというような個々の情報の正確性とは別の問題である。見る人によって資料への説明が変化し得るという、その事実の問題であり、多数の人の意見が同時に提示される場で、はじめて見出し得る類の面白さである。

こうして、じかに上映会に接してみればはじめて、会場の声を広く収録する必要性を認識させられることとなった。これらを踏まえると、情報の収録に当たっては以下の条件への配慮が必要であったと言えるだろう。

- ・複数箇所から同時に発せられる声の内容をそれぞれ個別に聞き取れるレベルで収録すること。
- ・観覧席全域を収録範囲に収め、可能な限り多くの声を集めること。

翻って口之島上映会を検証すると、使用した収録機材の数は少なく、会場の眩きを十分に拾うことはできなかった。会場の事前調査や参加者数の想定が難しかったとはいえ、認識が十分ではなかったと言える。

また、他にも不十分だった点を指摘しておかなければならない。それが[2]の収録機材の能力への認識不足である。

例えばPV1の配置は、観覧席後方の音声も広く収録することを期待したものであった。上映開始前に会場で行った稼働テストでPV1は5m以上離れた人の話し声も収録することができたため、この配置でも十分間に合うと思われた。しかし、閑散としていたテスト時と異なり、上映会が始まれば、当然なのだが、面積あたりの人数密度が高まり騒然としてくる。つまり、5m先の話し声はその手前の人の声と身体で遮られる。実際のところ上映会中のPV1は半径1m弱程度の範囲内の音を拾うにとどまり、それも辛うじて聞き取れるレベルの音しか拾うことができなかった。それより遠くの声は手前の人の声に掻き消され、聞き分けが困難になる。またその手前の声も、より音量の大きなマイクを通した進行役の声や、上述のような声を張ってくださる人の声がかぶさると聞き取りづらくなった。要するに、観覧席後部の音声はその多くが拾えなかったのである。

なお音声の問題とは少し外れるのだが、PV1の操作にも問題があった。PV1は上映内容の撮影をも担当しており、その操作手は同時に観覧席後方の撮影と音声の収録も行おうとして、しばしば移動やパン（固定したカメラの向きを振ること）を行った。これが裏目に出て、上映内容の切り替わ

り時にカメラがスクリーンの方を向いていない状況もまま発生した。データ整理について説明するなかで後述するが、これは、データ整理時に上映内容の区切り点が不明瞭になることを意味する。その上、音声の多くが拾いきれていないとなれば、カメラ移動のメリットは薄れてしまう。

集音能力への認識不足は、ICレコーダーに関しても言える。映像操作席左手側にあったICD-UX200は常時稼働機であったが、この配置のために観覧席のスクリーンに向かって左手前面の音声を専ら拾い、観覧席中央より右手前面の音声をほとんど拾うことができなかった。左手前面からの音声が他の音声をかき消し、かつ、操作手の体が壁になり右手側の声あまり届かなかったためと思われる。右手前面には年配者の方が多くいらして盛んに言葉を交わしていただけに、データ整理時には痛恨を味わうこととなった。

つまり、実質的には口之島での音声収録は、HDR-FX7のガンマイクと、HDR-XR550のワイヤレスマイクによってのみ行われたのである。ちなみにワイヤレスマイクは観覧席の座席の上に置かれており、使用された場面では観覧席の眩きをある程度鮮明に収録していた。部分的な撮影にしか使用しなかったことが惜しまれた。

上映会終了後、執筆者は口之島で収録したデータの聞きにくさに愕然とし、その要因を概ね、以上2点の不備によるものと考えた。中之島の上映会の収録は、これらの検証と反省を踏まえて実施することになる。

3. 中之島での上映会とその検証

1) 上映会の開催

【概要】

開催日時：2011年3月19日14:00～16:30

会場：十島村役場中之島出張所（コミュニティセンター）

観覧人数：約70人

使用機材：ビデオカメラ×2（SONY HDR-XR550×2）

三脚×2（SILK MASTER delux、Velbon SuperAce II）

デジタルムービーカメラ×1（SANYO Xacti DMX-CS1）

ICレコーダー×6（OLYMPUS DS-700×5、SONY ICD-UX200×1）

照明スタンド×6（形式型番不明）

ラップトップパソコン×1（Panasonic CF-F9）

電源用リールコード×1（現地借用品、形式型番不明）

映像出力用プロジェクター×1（現地借用品、形式型番不明）

自立式スクリーン×1（現地借用品、形式型番不明）

【機材と配置】

中之島の上映会の進行は、基本的に口之島と同じである。よって進行については記述を割愛する。ただし、収録方法と機材の準備・配置には大幅な改良を図った。上映開始時の会場の配置状況を図2に、また、上映会場開場前の配置状況を図3に示す。配置の図が2点あるのは、上映開始直前に会場の配置転換を行ったためだ。この事情については後述する。

撮影機材

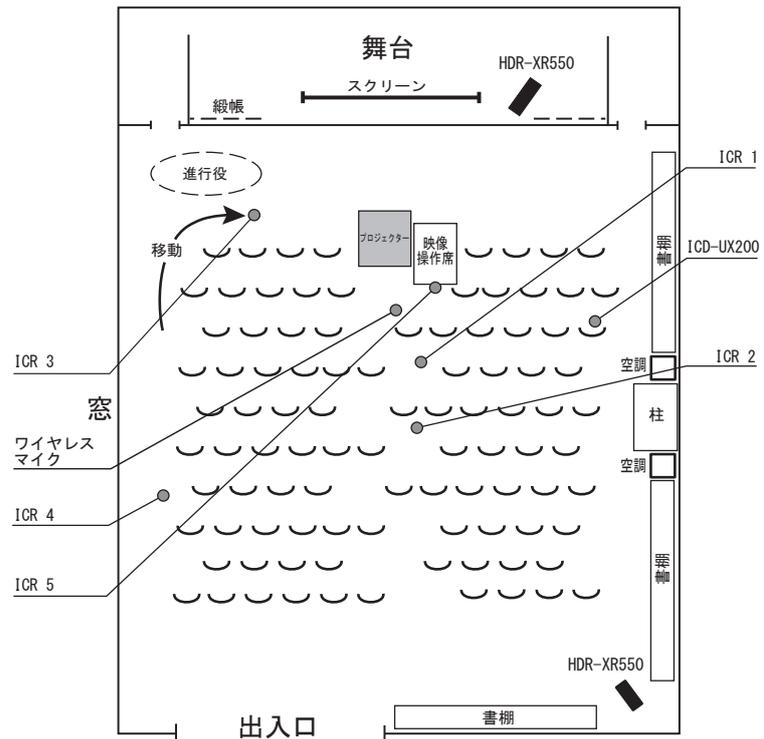
カメラはPV1の使用をやめた。この調査のためにHDR-XR550を新たに1台導入し、口之島で

も活躍したもう一台のHDR-XR550との計2台で観覧席を前後からカバーした。カメラの配置は口之島での方法を踏襲している。各カメラに求めた役割も口之島と同様である。

口之島と違う点はまず、これらをいずれも固定カメラとしたことだ。また、後方のカメラは最大広角でスクリーンを視野に入れて向きを固定し、上映中は操作手も付かない放置稼働とした。前方のカメラにのみ操作手が付く。いずれも電源はACアダプターを利用した。

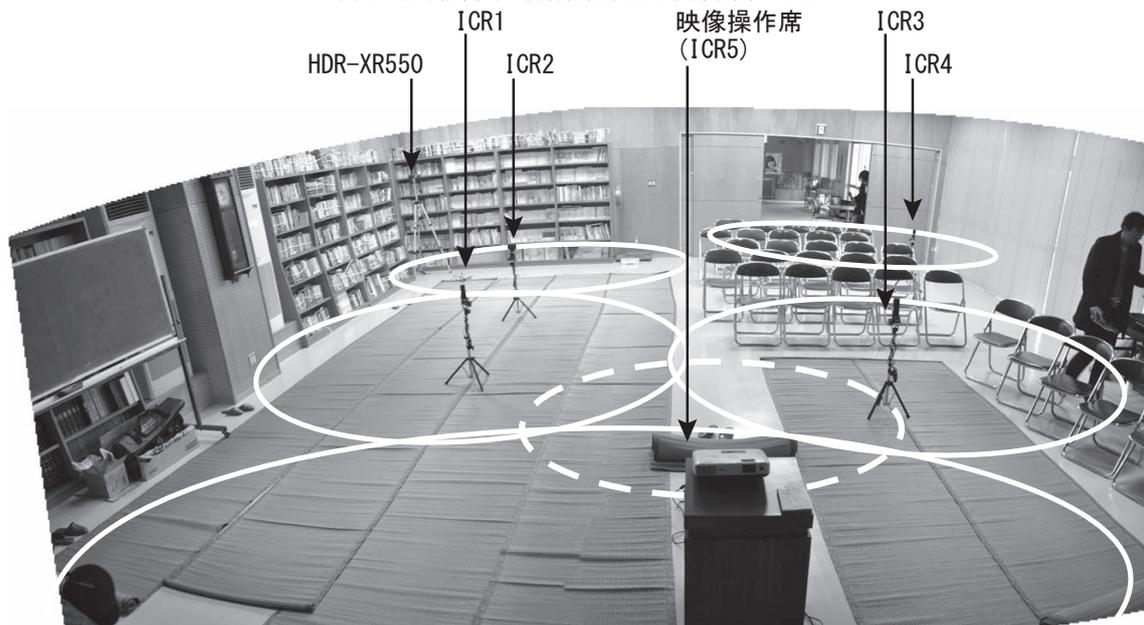
さらに各カメラには外付けマイクを装着した。まず舞台袖のHDR-XR550にはガンマイクを装着、観覧席前列の音声も合わせて収録することを狙う。これは口之島でガンマイクを装着したHDR-FX7が良好な音声

図2 中之島の会場略図



ICR (ICレコーダー) 1~5はすべてDS-700。映像操作席左後方のワイヤレスマイクは観覧席右後方のHDR-XR550に音声を送っている。ワイヤレスマイクとICD-UX200は遊軍機として追加で配置したもの。本図も図1と同様に概略図であり、縮尺は考慮しておらず、施設設備にも実際とは異なる点がある。

図3 会場設営時の機材設置状況と収録範囲の想定



白い円弧は会場設営時に想定していた各収録機材の音声収録範囲。「ICR」は「ICレコーダー」の略。手前は舞台袖のHDR-XR550（ガンマイク装着）の収録範囲の想定で、ここには写っていないが左手側に機体が設置されている。破線は映像操作席に置くICR5の収録範囲の想定だが、この写真の撮影時にはまだ設置されていない。左手奥に見える観覧席後部のHDR-XR550はワイヤレスマイクの装着を予定していたため、収録範囲を想定していない。（因琢哉撮影）

収録能力を示していたため、カメラと同時に、新たに導入した。

後方のカメラにはワイヤレスマイクを装着した。これもまた、ワイヤレスマイクが口之島で良好な能力を示したことによる。このマイクは上映中に発言や会話の多い席の近くに配置する、いわば遊軍機の録音機材としたことから、後方のカメラは上映会開始時には内蔵マイクで観覧席右後方周辺の音声を収録し、途中からワイヤレスマイクで映像操作席後方（観覧席中央前面）の音声を収録した。

なお、2台のHDR-XR550の控えとしてDMX-CS1を1台準備し、遊軍機とした。撮影は本共同研究の同行者の一人に依頼した。ただし、同機の集音能力は高いとは言えず、期待したほどの役割は果たしえなかった。

録音機材

こちらは口之島の教訓から、ICレコーダーの数を大幅に増強した。計6台を稼働させ、うち5台あるDS-700を上映会開始前から観覧席に分散配置して常時稼働機とし、残るICD-UX200を遊軍機とした。

常時稼働機は会場設営の段階で図3のように配置した。各機材には守備範囲が与えられ、観覧席前部の音声を舞台袖のカメラが、中部以後の音声は4台のDS-700(ICR1~4)が受け持つ。5台目のDS-700(ICR5)を映像操作席付近に置いて観覧席中央前面を担当させた。また、スチール写真撮影用の照明スタンドを簡易のマイクスタンドとして用い、ICR1~4はその頂部にビニールテープで巻いて固定した。(写真1)設置高さはおよそ1m前後である。これはレコーダーをある程度の高さに持ち上げることでより広範囲の音声を収録し、かつレコーダーの移動を容易にすることを狙った工夫である。口之島では観覧席の位置によって発せられるコメントの量に濃淡があったことや、時々ぼつりと興味深いことを呟く方がいたりしたことから、このような装置の使用を試みた。話を聞きたい場所に、随時レコーダーを移動させることを期待したのである。ちなみに照明スタンドを使用したのは機材準備時にたまたまそれが借用できたためで、深い理由は無い。

ICレコーダーの録音設定はそれぞれ広範囲の音声を拾うためのいわゆる「会議モード」とし、また照明スタンドに仕掛けた4台はデータ整理の際の時間軸の同期を考慮し、同時に録音を開始させた。



写真1 照明スタンドを利用した簡易マイクスタンド
中之島で試みたICレコーダーの設置方法。照明スタンドにビニールテープでレコーダーを巻きつけたもの。
(羽毛田智幸撮影)

もともと、この配置は上映開始直前に崩れて最終的に図2のような配置となる。ここに至り当初の思惑はその多くが空振りに帰すのであるが、それについては次の段で記そう。少なくとも音声収録という面においてはとりあえず、中之島では口之島よりも手厚い態勢をもって臨んだのである。

2) 検証と反省

口之島上映会の検証の甲斐あって、中之島で収録した情報は、口之島でのそれに比べるとはるかに聞き取りやすく、概ね、所期の目的を達成した。

ただし、それでもなお、改善の余地は少なかつた。3点ある。[1] 撮影方法の問題であり、[2] 録音機材の偏在であり、[3] 機材の能力についての理解不足であった。順番に検討したい。

まず[1]の撮影方法の問題であるが、これは専ら、カメラ操作手の錬度に関するものだ。上映中、舞台袖のカメラには操作手がつき、声を上げた観覧者に向けてしばしばズームとパンを行ったのであるが、このことがデータを書き起こす際に不便を感じさせるものとなった。カメラの視点移動のために、所々、観覧者の識別が困難になったのだ。

つまり、観覧者のコメントは概ね二人以上の人の間で交わされるおしゃべりであるから、会話の流れを押さえねば意味が通りづらい。そのため、会場の雑多な音の中から一連の会話を拾い出し、読んだときにそれが会話であると分かる形で書き起こす必要がある。ただ、作業に馴れないうちは聴覚のみで会話を捉えるのが難しいことがあり、どの発言とどの発言が同一人物のもので、どの発言が違う人物のものなのか、判別できなくなることもある。この時、もしカメラが観覧者を捉えていれば視覚で識別でき、作業はスムーズになる。しかしクローズアップを多用すると画面の外で発言した人物がだれなのか判別できず、書き起こしに際してストレスを感じさせられる。視点移動を不規則かつ頻繁に繰り返すと映像としても見難いものになる。書き起こしなど後の整理を考えるなら、観覧席全域を俯瞰するカメラワークを常に心がけ、特にズームは極力行わないほうがよいと思われる。

もっとも、これはどちらかといえば大きな問題ではない。それよりもデータ整理時に悩まされたのが[2]の、録音機材の偏在である。上映開始時の状態を示した図(図2)にあるように、映像操作席の背後には録音機材が集中した。図の縮尺は正確ではないが、これは、およそ半径2m内外をICレコーダー3台とワイヤレスマイクでカバーしている状態である。相対的に、他の部分の録音は薄くなっている。はじめ会場を広くカバーするように配置していた機材がなぜ偏在することになったのか。これについて述べるには、上映開始直前に行った「席替え」について触れる必要がある。

そもそも、すでに述べたように開場前の会場は図3のように組まれており、機材もこれに従って計画的に配置した。すなわち会場の4分の1をパイプ椅子による椅子席、他を莫塵席とし、3台のICレコーダーは莫塵席にあって人の声を高い位置から収録し、これらのレコーダーには届かないであろう椅子席の声はその横のICレコーダーでカバーするという目論見である。ところが、開場してみると莫塵席に座る方は一人もなく、皆が椅子席に着いた。急遽、役場出張所の方をお願いしてパイプ椅子を増やし、会場の後ろ半分を全て椅子席としたが、なお莫塵に座る方はなく、しかも来場者は増え続けた。やむなく上映開始直前に莫塵を全て撤去⁽⁶⁾し、出張所のあらゆるところから椅子を出していただいて全面を椅子席とした。この時、すでに椅子に着いていた方には各自その椅子を持って莫塵を撤去した前面に移動していただき、空いた後ろ半分に新たに椅子を置いて、後から来た方々にはそちらに着いていただいた。

この席替えにより莫塵席を念頭に置いた機材配置の目論見はその前提を失った。さらに、席替え時の人の移動が各機の接近、特にICR1、ICR2、ICR5の接近を招いた。上映開始時の慌しさに追われた執筆者はこの状況を是正できず、各機は接近したまま録音を続けざるをえなかった。ICR1とICR2の位置をそれぞれ後方に移動すればよかったのであるが、この時、執筆者の1人は映像操作に、1人は舞台袖のカメラの操作に当たっており手が離せず、当初は状況に対してほとんど気が回っていなかった。上映開始後少し経ってからやっと気付くのではあるが、混み合った、しかも席替えの影響で半ば雑然と配列された観覧席に分け入って機材を移動させるのも容易でなかった。移動を容易にさせるための工夫も、結果として所期の威力を発揮し得なかったことになる。

仮に移動できていたなら、間違いなくより多くの音声を鮮明に拾うこともできただろう。ICR2の後方には年配の方々がいらして、しばしば興味深い会話があったが、他の音に紛れてしまい、整理時には辛うじて大意をつかめる程度の情報しか書き起こせなかった。レコーダーの位置がもう少

し後ろであれば、より鮮明な音を拾うことができたものと思われる。

なお、映像操作席の後方にはワイヤレスマイクも置かれている。これは執筆者の手が回りきらなかったことから、共同研究者の一人に開会直後、特に会話が弾んでいる箇所があれば配置するよう依頼したものだ。この時、執筆者は他の機材の集音範囲を明示して適切な設置場所を指定するべきであったが、至らず、結果として集中する録音機材の輪の中に置かれることとなった。実際、この位置にはよく発言して下さる方が3、4人いらしたが、録音内容は他のICレコーダーとほぼ同一であり、ICレコーダーより音が鮮明なわけでもなく、特に有用な録音は得られなかった。後部カメラの周辺にICレコーダーが配されていないことを考えると、ワイヤレスマイクを使わずにカメラの内蔵マイクで周辺の音声を拾うという選択もできたかと思う。

そして[3]が、ICレコーダーの機械的特性への理解不足である。人の密集する観覧席のなかに置いたとき、レコーダーの能力がどのようになるかという想定には、なお至らない部分があった。

口之島での教訓から、中之島では準備できる録音機材を全て投入した。この際、口之島で一部使用されたレコーダーのデータがPV1のそれよりは多少聞きやすく思えたことから、ICレコーダー各機の集音能力はPV1より優れているという前提に立った。これは実際、その通りではあったのだが、誤りは、ICレコーダーの集音範囲が真円形だと考えていたことにある。

録音データからその実態を推測すると、この時のICレコーダー各機が内容を聞き取れるレベルで音を拾えた距離は人数にしておよそ3人前後といったところであった。ただしこれはレコーダーから見て観覧者の口が見える方向、つまりスクリーンに向く方向を前とした場合の、左右と後ろの3方向に限られる。これに対し、レコーダーに背を向ける方向、つまり前方の人の声は、あまり聞き取れない。人一人隔てれば聞こえなくなる、と言うとやや大げさだが、聞きやすさは格段

に落ち、2人隔てれば細かな声の聞き取りは困難になる。同様に、左右と後ろでも人一人隔てると急激に聞こえにくくなる。

これらのことから、上映中、声を張らずに隣の人と話すような声を各ICレコーダーが拾える距離は、推定だが、最短では1m前後、最大でも3mを大きく出なかったと思われる。集音範囲は、弧の中心付近にレコーダーを置いた扇形のような形状⁽⁷⁾(図4)をしていると考えられる。

こうした想定が事前になかったため、例えば窓際にあるICR4の配置などは無駄が多い。これは椅子席をスクリーンに向かって左側面から押さえようとしたものだが、スクリーンに近い方向の音声はほとんど拾えていなかった。観覧席の内側に配置すれば、より効果を上げたものと考えられる。



○: 会話がそのままの状態でも聞き取れる程度の音声データ。

△: 会話の大意、単語が理解できる程度の音声データ。

×: ほとんど会話の内容が聞き取れない程度の音声データ。

4. データの整理

さて、2時間半にわたる上映会によって得たデータの量は、それなりに膨大である。

例えば口之島の場合、約2時間半の上映会の様子は主にカメラ4台とICレコーダー4台に収録され、収録時間は延べでざっと7時間弱に及ぶ。この中からある資料についてのコメントを抽出するのは、いささか骨が折れる。個々の資料に対するコメントがそれぞれのデータの何分何秒の位置に収録されているのか、データの利用に際して、その目安くらいは欲しいものだ。つまりここで言う整理とは要するに、どのデータのどこに、どの資料についての情報が収録されているのか、その目次をつくる作業に他ならない。

執筆者はこの作業を1)整理準備、2)書き起こし、3)時間軸の同期、4)資料との対応の整理という、4つの工程で実施した。このうち3)と4)は2)とほぼ同時に実施している。以下、各工程について説明する⁽⁸⁾。

1) 整理準備

収録後手を加えない状態のデータ(生データ)は、使用機材によって規格やデータ量が異なる。例えばDMX-CS1は映像をMPEG4として保存し、PV1は磁気テープであるMiniDVに保存し、ハイビジョン撮影に対応するHDR-XR550はデータをAVCHDという規格で保存する。このままではそれぞれに合わせて再生のための環境を整えねばならず、しかもAVCHDのデータなどは1分あたり約80MBともの凄く重い。書き起こしやデータ間の比較などをするのに非常に手間を要する。

よって、まず整理に入る前の準備として、これら生データを閲覧と作業が容易な形式に統一し、かつ管理しやすいように番号の付与を行う必要がある。閲覧と作業が容易な形式とは、特に高スペックなパソコン環境を必要とせず、全てのデータがひとつの動画再生ソフトで再生可能で、しかも再生・早送り・巻戻しを繰り返しても動作に支障を来たさない程度のデータ量を持った形式のことだ。

執筆者は映像データの形式をWMV、音声データの形式をmp3に統一したものを準備した。これらのデータ規格は広く使用されておりWindows機であれば大抵の場合インストールされているであろうWindows Media[®] Playerで閲覧することができる。画質は若干劣るもののデータ量も手ごろで、執筆者の環境ではどのパソコンでも作業可能であるため都合がよかった。なお、生データはバックアップとして保存した。

規格の統一にあわせ、作業用のデータには管理のためのファイル名を付与した。ファイル名には「撮影年度」、「調査地」と「機材の通称」の略号、「通し番号」を盛り込む。例えば「09年度」の「口之島への調査行」で「高城のカメラであるHDR-XR550(通称・高城カメラ)が撮影した映像」の「2番目のファイル」は「09kctg02」となる。「kc」は「口之島(KuChinoshima)」、「tg」は「高城(TakaGi)カメラ」の略だ。2番目というのは映像を時系列順に並べたときの2番目という意味である。なお、略号を付与するに当たっての法則などは特に意図していない。

2) 書き起こし

データの規格統一ができれば、いよいよ収録された音声や映像を文字に起こす作業となる。

起こすのは観覧席の話し声に限らず、マイクを通した進行役の発言も起こすほか、柱時計のベルのような特徴的で大きな音声があれば備考にその旨を記載する。このような大きな音声はどの機材にも収録されるため、特に音声データを参照するときはそれが上映会のどの時点なのか知る手がかりとなる。また、そのような音声中でも特に、上映内容が切り替わる際に発せられる音声は、各データ間での時系列の同期や資料との対応の際に有用な指標となる。例えば進行役が「次の写真は」とか「さて、この場所は」などと観覧者の注意を促すような発言がこれに当たる。この指標となる音声を執筆者は便宜上「ランドマーク」と呼んだ。ランドマークは後述する時間軸の同期や資料との対応を明らかにする上で重要な働きをする。ランドマークに適した音声を書き起こす際は、その再生時間も記録する。

なお口之島の検証と反省のところで、カメラがスクリーンを向いていなかったために不都合であった、と述べたのはこの点に関連する。映像が切り替わる時にスクリーンが見えなくてはランドマークが決めづらい。中之島で観覧席後部のカメラの向きを固定したのもこのためだ。ランドマークの決定は書き起こしと同時に行った。後に 3) でもう少し詳しく述べる。

書き起こしのフォーマットは Excel によって作成した。また、4) で述べる資料との対応につなげるため、書き起こしはスクリーンを捉えた観覧席後部のカメラのデータから優先的に進めてゆく。

録音態勢の相違から、書き起こしの方法は口之島と中之島で異なっている。(図5)口之島のデータでは文脈を追える音声が少なかったため、原則としてランドマークとなる音声の冒頭部分を書き起こし、これに対する会場の反応のなから単語や短いセンテンス、あるいは言葉の大意を拾い出し、極力もとの言い回しをなぞるようにメモを取った。進行役と会場との問答があれば、これについても質問と応答を簡単に記した。ちなみに、ランドマークとなり得ない進行役の声は起こしていない。よって口之島では起こされた進行役の言葉は全てランドマークとしての働きを負っている。ランドマークとメモは一行にまとめてある。聞き取りが可能であれば長いセンテンスを書き起こすこともあるが、部分的なものだ。

総じて、口之島の場合、行った作業は書き起こしというよりも「インデックス作り」といった性格が強い。

録音状態が比較的良好であった中之島では、極力、もとの言い回しを聞こえるまま文字に起こした。これをここでは「ベタ打ち」と呼ぶ。この場合、口之島のように複数人の声を一行にまとめるようなことはせず、1人の言葉を1行に記すこととした。つまり観覧者AとBの会話を起こす場合、1行目にAの言葉、2行目にAに答えるBの言葉を記す。また、会話が複数箇所で行われている場合は会話ごとにまとめて起こし、文面上は直列化する。観覧者A-Bの会話とC-Dの会話を、文面上ではA-Bの次にC-Dが話されているように起こす⁽⁹⁾のである。島の言葉を標準語に変換するようなことはしない。

また、中之島ではある程度頻繁に話す観覧者の声にそれぞれ識別記号を付与した。各行にこの記号を付すことで会話の流れが文面上でつかめるようになった。ただし時間的な都合から徹底はしていない。

次に、作業の所要時間について概算しておきたい。ベタ打ちの場合、作業一人が書き起こしに要する時間は実際の時間の12倍から13倍の時間が必要であった。より簡単なインデックス作りであっても、5倍や6倍の時間を要した。10分の音声を書き起こすのに、ベタ打ちでは120分から130分、インデックス作りでも50分から60分はかかる計算になる。作業者の錬度向上等によ

図5 書き起こしの例

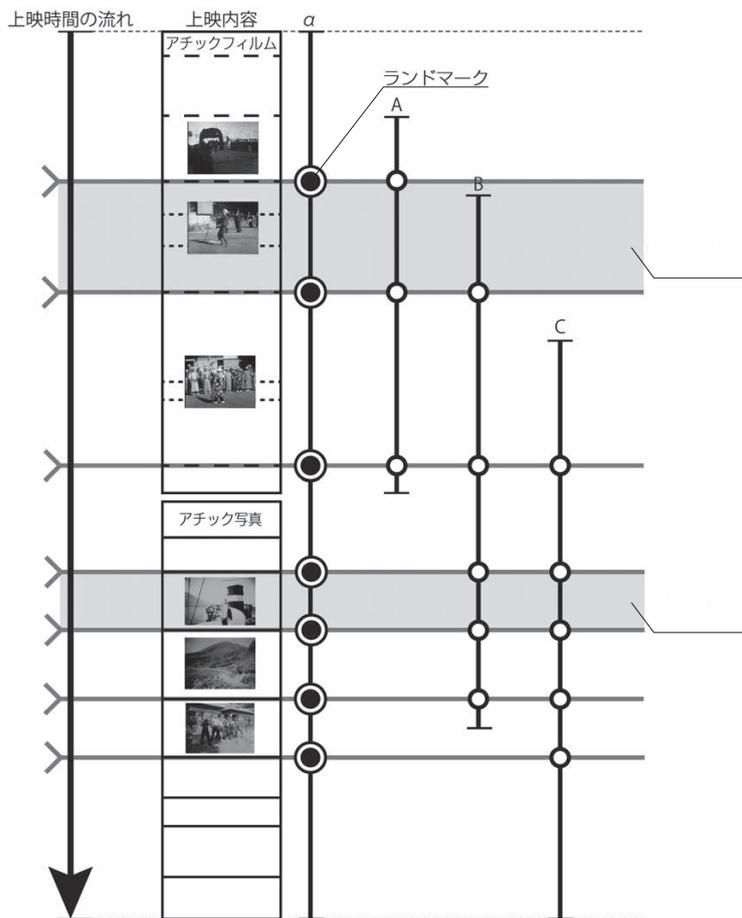
口之島

通番号	始 終	ランドマーク (司会の音声など)	内容概略 (映像、話の内容など)	単語、会話 (拾えるもののみ)	備考
09kcjs0 1-036	0:51:03 0:51:17	小島「これ船はなんて呼んでますか」		スブネ 魚釣りする	
09kcjs0 1-037	0:51:17 0:51:56	小島「これ材料は何で造るんですか」		スギ (決まった木は) ない ロウソク	
09kcjs0 1-038	0:51:56 0:52:08	小島「底と側面で材料が違うんですかね」		海の近く	
09kcjs0 1-039	0:52:08 0:52:44	小島「これはどこでしょうか」		浜 マエノハマ 台風で流れてる	
09kcjs0 1-040	0:52:44 0:53:30	小島「あの小屋はなんでしょう」		下の小屋が漁師小屋 港 右から2番目のやつじゃ ないですかね 小屋 カヤ ダイクが帰る	
09kcjs0 1-041	0:53:30 0:54:30	小島「これは家自体は何で」		躰節 屋根は竹 板 床 も 竹 編んで	
09kcjs0 1-042	0:54:30 0:55:42	小島「歓迎のために門を」		船 一人ひとり	
09kcjs0 1-043	0:55:42 0:56:27	小島「これは何の」		ベニバナ 狂言	
09kcjs0 1-044	0:56:27 0:57:20	男性「これを復活したのがですね」		今から17、8年前 棒踊り ダイ神楽	
09kcjs0 1-045	0:57:20 0:58:00	小島「先生方から校長先生に似てる」		盆踊り 帯が白 ドンド 節	
09kcjs0 1-046	0:58:00 0:58:46	小島「これは今もされている」		ドンド節 サンサ節 ド ンドン節 裸足 下駄	

中之島

行番号	始 TC	ランドマーク (司会の音声など)	上映内容	発言	発言者	備考
10nkopa01 -01461	1:53:40	高城「はい、じゃあ次の写真行きます」	AL010-045	はい、じゃあ次の写真行きます、ええとこれは、先ほどのとこ、と近いかもしれません、ここはどこか判りますか	高城	
10nkopa01 -01462			AL010-045	これは、西の海岸や	d	
10nkopa01 -01463			AL010-045	西の海岸ですね、で、今、なんか、ある、温泉の建物とかどのへんかわかりますか	高城	
10nkopa01 -01464			AL010-045	あそこに建物あるが		
10nkopa01 -01465			AL010-045	あの二階建てが、昔の		
10nkopa01 -01466			AL010-045	昔の、あの青年クラブちゅうてですね	d	
10nkopa01 -01467			AL010-045	青年クラブ		
10nkopa01 -01468			AL010-045	青年クラブ、どれですか	高城	
10nkopa01 -01469			AL010-045	その、まだこっち、まだ左、その上		
10nkopa01 -01470			AL010-045	もう少し		
10nkopa01 -01471			AL010-045	その上、あ、それ	高城	
10nkopa01 -01472			AL010-045	それぞれ		
10nkopa01 -01473			AL010-045	いや		
10nkopa01 -01474				左		

図6 各データの時間軸同期概念図



- ・「ランドマーク」とは上映内容の切り換え点の目安となる音声のこと。
- ・ α は上映会を最初から最後まで収録した機材のデータを示す。A～Cは上映会を部分的に収録した機材のデータを示す。
- ・上映内容アチックフィルムの粗い破線(---)は「切り分け」た映像の区切りを表し、細かい破線(.....)は「カット」の区切りを表す。
- ・ α に収録されたランドマーク(●)をもとに、ABCから同様のランドマーク(○)を探することで、各データの時間を同期する。

30 cm のデータもあれば、20.3 cm、8 cm のデータもあり、しかもその始点は 0 cm のところであったり、14 cm や 12.7 cm のところであったりする。そして、これらのデータは、そのままではそれぞれがどこを始点とした何 cm のデータなのか、判別しにくい。

つまり、個々のデータの長さや始点を明らかにして定規の上に並べなおす作業が、時間軸の同期だ。同期させるため、2) で述べたランドマークを使う。ランドマークは、定規の目盛に相当する。

例えば、上映会を最初から最後まで収録した機材 a と、途中から収録した機材 A と B があるとしよう。ここで、 a の再生時間 0 : 03 : 00 に収録した音声をランドマーク L と決めたなら、次に L の所在を AB 両者のデータから探し出す。A が再生時間 0 : 01 : 01、B が同 0 : 00 : 10 で L を収録していたなら、これ以降のデータは a の 0 : 03 : 00 以降のデータと同じ時間軸の上にあるデータである、ということになる。A の 0 : 01 : 10 について他の機材の録音が聞きたければ、 a の 0 : 03 : 09、B の 0 : 00 : 19 の周辺を当たればよいわけだ。

ここで言う機材 a のデータが、上で喩えた定規に当たる。上映内容を撮影した観覧席後部のカメラのデータがこの役を担う。始めから終わりまで稼働していただけてなく、上映内容が変化したときの音声を確認できる唯一のデータであるためだ。よってそこに収録されている音声のなかからラ

る短縮は部分的には可能であるが、しかし、各々が勝手に喋るのを文字化する作業は予想以上に混沌とすることもある。これらの作業時間の短縮は、あまり容易ではなかった。

なお、これは口之島・中之島両島でいえることだが、映像データの書き起こしをする場合は、もし観覧者が特徴的な身振りなどをしていれば、これも簡単にメモしておくといよい。言葉だけ書き出しても、読み返すと意味が分からなくなることは少なくない。

このような書き起こしがある程度進むと、データ同士の時間軸の同期をさせることができるようになる。

3) 時間軸の同期

時間軸の同期とは、各データを時間ごとに並べなおすことである。(図6)データの収録は同じ時刻に一斉に始めるわけではない。上映会の時間を一振りの 30 cm 定規に喩えるなら、

ンドマークを決定し、これをもとに全てのデータの同期を図れば、そのまま次に述べる 4) へとつなげることができる。

ところで、ランドマークの決定の前に、あらかじめ片付けねばならない作業がある。ランドマークとは上映内容が切り替わるときに収録される音声であるが、この「切り替わり」について考えなくてはならない。

写真であれば簡単だ。会場のコメントは常に一点の写真に向けられたものと考えればよいし、スクリーンに次の写真が映されたなら上映内容はそこで切り替わったことになる。次の写真が映された時点でランドマークを置けばよい。

しかし、フィルムではこうはいかない。フィルムは連続して流れる一連の画像であって、会場のコメントは資料のなかのごく一部、その瞬間に映し出された画像に向けられる。つまり、コメントとフィルムとの対応を示すには、コメントが出たときに上映されていた箇所の再生時間を示さねばならない。ただし、コメントのひとつひとつについて対応する再生時間を示すのは非常に手間であり、その手間に見合った有益性も多くない。

そこでフィルムを短時間の小さな映像の集合として考え、その小さな映像の個々と各コメントとの対応をとることとした。小さな映像とは、映像制作の用語でいうところの「カット（あるいはショット）」であり、あるいはその集合である。そのためにまず映像に含まれるカットの始点と終点の再生時間を全て記録し、これをカットの内容ごとに集合させた。この作業をここでは映像の「切り分け」と呼んだ。この後、会場のコメントは切り分けた映像の個々と対応させてゆくことになる。ランドマークもまた、切り分けた映像の始点に合わせて置くことになる。

なお、映像制作の用語に「シーン」という用語があるが、ここでいう「集合」は必ずしもその概念に相当しないものと思われる。切り分けはあくまでも作業上の都合に従って行ったもので、映像の文脈は二の次に置いた。例えば、民具を映した映像が4カット続き、1カット目と2～4カット目が別々の民具を捉えているとして、映像の文脈を考えるならこれは4カットでひとつのシーンとすることができるが、ここでは個々の民具に対するコメントを分けて扱いたいために、1カット目と2～4カット目を別の集合として切り分けている。

ちなみに、『叢書』資料編の153頁に記載した映像の階層化は、ここで行った切り分けを発展させたものだ。合わせて参照されたい。

4) 資料との対応

最後に、会場からのコメントがそれぞれどの資料に向けて発せられたものであるのかを特定していく作業について述べる。この作業は、実際には 3) とほぼ同時に行う。3) が完了すれば、4) も自ずと完了することになる。

例えば写真資料の上映ならば、資料Aが映された時の進行役の声、つまりランドマークから、切り替わって資料Bが映された時のランドマークまでを一区切りとし、この区切りの中で観覧席から発せられた声を資料Aに関わるものとする。ただし、実際は資料Bに切り替わったあとも観覧席では資料Aについて話されていることが多々ある。この場合は、それがひとつ前に上映していた資料についての話である旨を備考にメモしておく。この段階の終了を持って、一通りの整理ができたことになる。

以上の4工程を経ることで、後日、観覧者の声を資料ごとに検索することが可能になる。また、もとの映像・音声データに立ち返って任意の箇所を再生し、確認することも容易になる。

昨年度、本共同研究が刊行した『叢書』資料編の「アチック写真本目録 2013 年度増補版」には、「現地の声」としてそれぞれの写真資料に対する島の方々のコメントの要約を掲載している。この要約は以上のように整理した上映会データから抽出したものである。

5. 「次回」のために

本共同研究は本書の刊行を以て終了する。このような視覚資料の現地上映が今後も行われることがあるのか、つまりは「次回」の有無について、現時点で執筆者らは知り得ない。ただし、上述の検証と反省をもとに「次回」の要領について考えておくのも無駄ではないように思う。以下、マニュアルと言えるほどのものではないが、中之島で得た反省を踏まえつつ、「次回」のために考慮すべき事柄を、所感を交えながら簡単にまとめておくことにする。

1) 上映の進行について

実のところ、上映の進行について機材の配置や操作を担当していた執筆者が触れるべきことはあまりない。ただ、敢えて言うなら、本共同研究のような会場へ問いかけとともに上映を進めるやり方には興味深い点が多く、「次回」以降も採用し得る有力な方法として検討してもよいのではないかと思う。

多数の人々に対する上映会は、個別に聞き取りを行ったのでは得られない興味深い状況を作り出す点に特徴がある。例えば資料についての情報が、一個人の知識としてではなく、多くの意見の中から立ち上がるものとして現れる。そのため口之島上映会の検証と反省の段でも述べたように、資料に対して観覧者それぞれから異なった意見や認識が示されることもままある。こうした情報の取り扱いには注意が必要で、時には再調査⁽¹⁰⁾によって掘り下げる必要もあろう。正解不正解で割り切ることのできない場合もあるかと思われる。ただ、その一方で、観覧者の意見の一致から導き出される情報もあり、そういった情報であれば一個人への聞き取りで得られた情報よりは多少確度の高いものとみなすこともできるだろう。

また、本共同研究の上映会には、現地の方々の間での情報の交換を促す作用もあるようだ。状況に応じた一時停止や巻き戻しの繰り返し、観覧者同士が話し合うための時間的な余裕を生んだようである。このため上映中は、同世代同士での会話がなされるのはもちろんのこと、若い世代が昔のことを年寄りに尋ねる姿も見られた。これがゆくゆくは世代間の交流や情報共有への端緒となることでもあれば、資料の現地への還元という観点から見て意味のある催しだったと言えるのではないか。

以上を考えると、本共同研究の方法には、なにもせずただ鑑賞して上映を終えるのとは違った意義を見出せるように思う。

ただし、これが簡単な方法でないことは確かである。そもそも、観覧者から次々と発言が寄せられるような状況など最初から望むべきではない。各々が勝手に話せる雰囲気があってはじめて資料にまつわる情報も現れ得るから、空気を読みつつ会場の雰囲気をほぐすのが、進行役の重要な仕事になる。観覧者の独り言のような呟きを拾い上げて話題を広げるような工夫や、こちらの質問で会場の会話を断ち切らないような配慮なども求められるだろう。

また一方では、上映時間との兼ね合いから上映内容を一部割愛する判断にも迫られたりする。総じて、進行役の負担は大きなものとなるはずだ。あらかじめ資料の内容を把握し、質問の内容を考慮するなど、事前の準備が欠かせないのである。

2) 撮影機材について

上映用に使用した機材については、特に改善の必要を感じていない。映画を撮影しようというのではないので、撮影機材には会場内の状況把握、時間ごとの上映内容把握、そして音声記録の3点がこなせるだけの能力があればよい。可能であれば、ビデオカメラを最低2台は欲しいところではある。これにより観覧席を前後からカバーする態勢を作ることができる。カメラは高級機である必要は無いが、拡張性は必要だ。内蔵マイクだけでは音声記録が難しい。ガンマイクを装着することができるものを選びたい。

これら2台のカメラはいずれも固定カメラとして用いる。できる限り観覧席全体を俯瞰できるように設置し、不用意なパンやクローズアップは行わない。カメラと観覧席の距離にもよるが、こんにち市販されている中級以上のカメラであれば、観覧者個々の様子は俯瞰であってもある程度鮮明に記録することが可能であろう。観覧席後方に置くカメラは常にスクリーンを視野に入れ、上映内容の記録を最優先事項とする必要がある。

欲を言えば、遊軍機として第3のカメラも欲しいところだ。口之島では島の方が狂言の一節を実演してくださる場面があり、このような時、自由に動いて対象に近寄れるカメラがあると、心強い。重ねて言うが映画を撮影しようというのではないため、上記の2台のカメラよりはやや安価なカメラでもよい。短時間の撮影と割り切るなら動画撮影機能を持つデジタル一眼レフカメラなどでもよいと思う。

いずれにせよ、電源の確保は重要である。大容量のバッテリー、もしくはACアダプターを準備しておきたい。

3) 録音について

執筆者は録音にICレコーダーを使用した。これについてはなお検討の余地がある。理屈上、設置数を増やしていけばいつかは観覧席全域のカバーも可能ではあるが、必然的にデータ量も増大するため、整理の手間を考えると現実的とは言えない。

収録後の整理は必要である。ベタ打ちはやや極端ではあるにせよ、収集したデータの活用という点を考えるなら、やはり、どのデータの何処に何があるのかについては文字にしておく必要があるだろう。各データ間の同期と、データと資料の対応関係を確認するくらいのことは、やっておかねばならない。むろん、未整理状態でも使えないことは無いが、そうすると利用者にデータ利用に際した習熟が求められることになり、結果、極めて扱いづらいデータとして日の目を見ることはまずなくなるだろう。

よって、単純に機材を増やせばよいという話ではないと思われる。整理作業に充てられる時間と人員を考慮する必要がある。

また、目的として上映会に何を求めるのか、という点にも関わってくるだろう。調査地への資料還元のみを目的とするなら、そこまで必死に声を集める必要はあるまい。ただし、現時点で残されている情報を集めておきたい、という目的を合わせ持つなら、可能な限り多くの情報が拾える態勢で臨みたい。

付け加えて、録音機材がそのように所狭しと並ぶ状況は、観覧者にとってあまり心地のよいものではないように思う。実際に上映中、ICレコーダーが近辺に置かれたとたん、ぱたりと会話をやめてしまわれた方もいらした。会場の私的な会話を拾い上げることには、言葉は悪いが盗み聞きのような側面もある。収録機材の使用を進行役からアナウンスしているとはいえ、抵抗を感じる人が

いらっしゃるのも無理はない。

上記の諸点を考えると、独り言から進行役への発言まで、そして観覧席の右の隅から左の隅まで、質量共により多くの声を広く拾いつつ、可能な限り少ない機材で実現する工夫を考慮する必要がある。これを言うことは容易だが、実現は難しい。

とりあえず、執筆者はその回答のひとつとして、人体に遮蔽されない高い位置から状況に即して機動的に録音するような機材の運用を提案したい。

中之島で用いたようなスタンドの利用が、一応、この点も視野に入れた工夫ではあった。ただし、思うように行かなかったのは既に述べた通りだ。スタンドに取り付けることである程度の集音範囲は確保できたようであるし、レコーダーの移動も容易にはなった。例えば進行役の付近にあったICR3は進行役の機転によって移動(図2参照)され、舞台袖カメラでも聞き取れなかった方々の声を拾うことに成功した。だが、それも観覧席の外縁に置かれていたために可能であったもので、席の内側に置かれたものの移動はできなかった。スタンドの脚が椅子の下に入り込んでしまっており、移動が困難だったためである。観覧席内の通路を広く取れば状況も変わるだろうが、中之島の会場では、会場の面積がそれをも許さなかったため、席替えがなくとも無理だったろう。公民館のような場所で上映をすれば必ず同じような状況に直面するであろうから、スタンドの使用を最善の策とすることはできないように思う。

もし予算等が許すなら、いっそ映像制作の現場で見られるような頭上に吊るして収録するタイプの機材を使用すれば、より広範囲の音声は鮮明に録音できるのではないかと思われる。カメラと同様、レコーダーへの外付けマイクの導入には有効性が期待される。レコーダーに内蔵されているマイクはその性能も限られる。集音範囲を広げられるよう、より感度の高いマイクを装備し、かつその位置を頭上に持ってくることで、多少は条件をよくすることができるのではないか。また、ガンマイクのような指向性を持つ機材も取り入れて、話が盛り上がっている席の音をピンポイントで機動的に拾いに行くといった方法も考える必要がある。無論、その際は遊軍機を運用する態勢が必要となり、作業人員の確保も必要になるだろう。

4) データの整理について

データの整理は、畢竟、収録したデータに何を求めるか、によって方針が変わって来よう。本共同研究は上映会における情報収集を実験的なものとして行った。中之島のデータをあえてベタ打ちしたのは、収録状況が良好であったためでもあるが、やってみたらどうなるのか、という試みとしての側面もある。

単に、データの何処にどの資料に関わるコメントがあるのか、という点のみを見ようとするのなら、ベタ打ちでなくとも用は足りる。中之島で行ったように、各資料に寄せられたコメントから聞こえる単語を抜き出してインデックスとして並べたり、整理作業者の主観によって要約しても、どうにか目的は達しうる。

また、実際問題として、島の言葉に慣れない執筆者が書き起こしたベタ打ちにも不明点は残されることとなる。聞き取れずに繰り返し聞きなおすことや、一旦ベタ打ちした後も、再度もとのデータを聞きなおすことがしばしばあった。同じはずの言葉が、機材によって違って聞こえることもあった。そのようにして作業時間を消費するのであれば、むしろ、最初から聞こえる単語や要約を文字として残し、データの利用者はそれを参照しながら直に音源に接したほうがよい、という考え方もできるかもしれない。当該地域に取りくむ研究者が自らの耳でデータに接したほうが、情報の確度が高くなることもあるだろう⁽¹¹⁾。

このように考慮すべきことは少なくないのであるが、しかし、実務に携わった者として以下の点だけは繰り返し強調し、言い残しておきたい。

資料情報の収集手段として上映会を催すのであれば、そのデータの整理も必ず行うべきである。収録して終わるのではなく、最低限、各データと個々の資料との対応関係だけは、なんらかの形で押さえておく必要がある。文字に起こす時間と人が用意できないなら、簡単な映像編集ソフトなどを利用して各データを編集し、資料に対応したスキップポイントを設置する、という方法も考えられる。これだけでもそれなりの手間はかかるだろう。しかし、ある資料についてのコメントがどのデータのどこにあるのか、最低限それだけでも分かるようにしておかねば情報収集の意味をなさなくなってしまう。これは、『叢書』資料編の作成に当たって収録データに何度も当たりなおした経験を根拠として「次回」に向けて薦めておきたい。

なお、書き起こすのであれば、ヘッドホンの使用は必須である。そしてどちらかといえば耳穴に詰め込むタイプではなく、耳全体を覆ういわゆるオーバーヘッド型を推奨したい。個人的な感想であり、好みや機種にもよるが、このタイプは表現できる音域が比較的広く、奥のほうで呟く声も聞き取りやすいように感じる。上映会の書き起こしは雑多な音の中から一人一人の声を拾い集める作業となるため、聴音の環境には多少気を使ったほうが仕事がやりやすい。高級機でなくとも、レコード店の視聴コーナーで使用されているような中程度の価格帯のものであれば、それなりに効果を感じられるように思う。

6. おわりに

本稿では、2010年と2011年に口之島と中之島でそれぞれ開催された上映会実施にあたっての概要と、その後のデータ整理の過程を技術的側面から記録し、自ら検証してきた。加えて、上映会とデータ整理で得られた検証と反省を踏まえつつ、「次回」のために考慮すべき事柄を所感を交えながら簡潔に整理した。

本稿で記述してきた覚え書きは、あくまで上記2回の上映会とそのデータ整理を根拠にした事例から導き出されたものであり、必ずしも全ての事例に最善な方法とは言い切れない。さらに、本共同研究で試みてきた上映会開催やデータ整理の具体的方法も試行錯誤しながら行ってきたもので、いまだ完成されたものではない。実際に作業に携わってきた者として、それぞれの検証と反省を活かしながら最善の方法を探ってきたつもりではあるが、至らなかったことも多々あるだろう。

しかしながら、「次回」の上映会のために本共同研究が行ってきた試行錯誤の詳細な記録を残すこともまた重要であると思われる。こうした具体的な記録が、「次回」に活かされれば、執筆者にとってこれほどうれしいことはない。

謝辞

次の方々には、大変お世話になった。

年度末のご多忙な中、さまざまな取り計らいをいただいた口之島の日高校長（当時）、中之島の徳丸さん。多岐にわたる支援によって終始我々の業務の根幹を支えてくださった加藤さん、小林さん、羽毛田さん。多大な信頼を寄せてくださった直属の上司である高城さんと、共同研究者の皆さま。そして折にふれて便宜を図ってくださった常民研と機構の職員の皆さま。この場を借りて、御礼申し上げたい。

注

- (1) ちなみに16ミリフィルムである原版のアチックフィルムは劣化が激しく、もはや上映に耐え得る状態ではない。したがってここでいうフィルムとは厳密には、2004年に常民研が作成したDVD-Rのようにデジタルデータ化された映像のことを指している。
- (2) 「パンフレット『アチック写真』の作成」：上映会の開催に先立ち、アチック写真のなかから各島で撮影されたとされる写真資料を抽出して掲載したパンフレット『神奈川大学日本常民文化研究所 アチック写真』を作成、配布した。上映会の宣伝と資料内容の周知を目的としたもので、2010年にvol.2を口之島に、2011年にvol.4を中之島に配布している。資料の画像のほか、目録番号・撮影者・資料を貼付したアルバム台紙に記されているメモの内容・撮影したアチック同人らの略歴などの基礎的情報を掲載し、共同研究者らから募った各資料への質問事項もあわせて記載した。なお、資料の掲載順序は目録番号順を無視し、被写体の傾向が似たものを寄せている。上映会におけるアチック写真についての質問は、ほぼこの冊子に掲載した質問に沿って行われ、写真の上映順序も掲載順序に揃えている。

作成に当たっては神奈川大学日本常民文化研究所職員の加藤友子、および2010年当時、国際常民文化研究機構の第一業務の研究補助者としてアチック写真の整理を進めていた小林光一郎・羽毛田智幸の3名から、多くの助言と助力を頂いた。この3名は機構発足前の2007年よりアチック写真の整理を行っており、小林・羽毛田の両氏は他巻の『アチック写真』の編集も手がけている。

ちなみに、『アチック写真』は2014年10月現在、vol.8まで刊行されている。本共同研究が編集したvol.2・vol.4を含めたvol.5までを下記のURLからPDFファイルとしてダウンロードすることができる。

<http://atticblog.jominken.kanagawa-u.ac.jp/publication.html> (2014年10月31日)
- (3) なお口之島・中之島両島で上映したのは、神奈川大学日本常民文化研究所が所蔵するアチックフィルム『十嶋鴻爪』の映像に、宮本記念財団が所蔵するフィルムの映像を挿入したものであった。これは本共同研究の共同研究者である原田健一が宮本記念財団のご好意を得て臨時に編集したもので、挿入された映像もアチックフィルム『十嶋鴻爪』と同じ時に撮影されたものである。また、時間の都合上フィルムの全てを上映することはできなかったため、口之島・中之島両島での上映会とも竹島から中之島までの映像を上映するにとどめた。
- (4) 目録番号とはアチック写真に付与されている番号のことである。詳細は『叢書』資料編の「アチック写真資料目録—本目録について—」を参照のこと。
- (5) 具体例のひとつとして、執筆者が上映中に見聞きしたカメラについての会場の反応が挙げられる。上映した映像の中に中之島で捕えられたカメラの映像があるが、これについて「カメラは食べるか」との質問を行ったところ、会場の大勢が「食べない」と答える中でごく一部の方が「食べた」と呟くのが聞かれた。「食べた」と呟いたのは比較的高齢の方であったように思われる。同様の傾向は翌年の中之島の上映会でも見られた。また、2014年2月に本共同研究が開催した公開研究会の場で、鹿児島県十島村立口之島小中学校前校長の日高松行は上映した映像に対する島民の反応の違いに触れ、資料を見て「あれは何だろうかと言っている人たち」は「よそからお嫁さんで(島に)来た人たち」であった、と述べている。寄せられたコメントについて考えるときはそれを述べた観覧者の世代や性別、出身を考慮に入れる必要がある。
- (6) そもそもなぜ莫塵席を設けることになったのか、執筆者は明確な経緯を思い出せないのであるが、少なくとも、ご高齢の方に地べたに座っていただくとした目論見は、足腰の具合の都合なども考えると得策とは言い難かったかもしれない。今後このような機会があれば、なるべく椅子の利用を前提として考えたほうがよいのかもしれない。
- (7) むろん、これは条件によっても変わってくる。まわりに人がいても、会場内が静かであれば聞こえる範囲は広がるが、大勢が大声で笑っているような状況では、直近の声でも聞き取りに苦労することになる。
- (8) なお、ここに述べる整理方法は高城と執筆者が相談の上、高城の決裁を受けて実施した。
- (9) この方法には難点もある。後日、もとなつたデータを確認した者がA-BとC-Dが同時に進行する会話だと知らなかったり忘れていたりした場合、若干の混乱を来すことになる。実際、執筆者が『叢書』資料編を作成した時は、この点でやや戸惑うことがあった。同時進行の会話には、なにかマークを付けた方がよいのかもしれない。
- (10) 上映中は時間の制約もあるために個々の情報について深く聞き返すことがまずできない。また、本文中でも述べたように会場の意見が割れることも珍しくない。従って、上映会で得られる情報はきわめて不安定なものだ。仮に、上映会で得る情報を調査などに利用しようとするのであれば、情報の整理と再調査には十分な時間と配慮が必要になるものと思われる。本共同研究も再調査を実施したが、執筆者の個人的な感想としては、情報の整理や精査が調査までに間に合わなかったこと、滞在時間が短かったことなどから、なかなか徹底しきれない点も多かったように思う。上映中に掘り下げたい情報を耳にしたらその場でメモを取っておき、再調査はこれをもとに行うのもひとつの方法であろう。なお、メモは情報の整理時にも有用と思われるが、口之島・中之島両島で

の執筆者にその余裕はなかった。

- (11) 本文中では触れていないが、執筆者は本共同研究が2010年に行った台湾調査での上映会のデータの整理も行った。そこでもベタ打ちの方向で書き起こしを行ったが、日本語と中国語と現地語とが混在して飛び交う音声のベタ打ちは、実際のところ、執筆者の能力を超えていた。単語レベルの語句をローマ字やカタカナで書き取るなど、やれることはやったものの、音声のほとんどは聞き取り不可として書き起こしを断念し、実質的には各収録データと上映した資料との対応関係を示すにとどまった。このような書き起こしにも一定の価値はあるはずだが、現地の言葉に精通した者によってこれを再確認してもらう必要があるだろう。

参考文献

神奈川大学 国際常民文化研究機構 2014 『国際常民文化研究叢書 8 —アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象— [資料編]』 神奈川大学 国際常民文化研究機構